　とある片田舎の町で――。

「それじゃあ行ってくるよ、ルフィア」
　今日も、小綺麗な一軒家の玄関を開けながら妻に挨拶をして、茶色い短髪の青年が仕事に出かける。
「行ってらっしゃい、ラーフェン。あまり遅くならないでね」
　軽いキスを交わして夫を送り出すと、ルフィアは目を細めてぐっと伸びをした。
　美しい金髪が、朝日を浴びてきらきらと輝く。
「さあ、早めに掃除を済ませて……と」
　のんびりと鼻歌など歌いながら、家事に取り掛かる。
　穏やかで幸せな日々だ。
　てきぱきと済ませると、冷たい飲み物を入れてソファにもたれながら、この間貸本屋で借りた恋愛小説の続きを読み始めた。
　物語の中では、主人公が想いを寄せていた幼馴染の女の子と紆余曲折を経て結ばれようとしているところだった。
「ふふっ、なんだか懐かしいわね」
　昔を思い出して、思わず笑みをこぼす。
　幼い頃から仲の良かった、もうずっと前に別れた幼馴染。
（リジェ、今頃どうしてるかしらね？）
　最後に会ってからずいぶん経つが、元気にしているだろうか。
　急な両親の都合で、お別れの挨拶もできなかったが。
　そういえば、最後に遊んだときに頼まれて、あの子と約束を交わしたのだった。
　自分はこの先永遠に、彼に仕えると。
　おそらくはリジェの方としても、子供の気まぐれな思いつきで、他愛もない口約束のつもりだったのだろうが……。
「……あら？」
　そんな事を考えていると、家のノッカーが叩かれた。
　来客のようだ。
（誰かしら、今日は特に誰かと会う予定はなかったはずだけど）

　そう思いながら本を閉じて立ち上がり、玄関を開ける。
　そこには、意外な人物が立っていた。
「久し振りだね、ルフィア」
「リジェ！？」
　もちろん、お互いに成長して、すっかり大人になっている。
　それでも二人とも、一目で相手を見分けられた。
「ああ、やっと見つけたよ……！」
　リジェは感極まったようにそう言って、ルフィアをぎゅっと抱き締めた。
　突然のことに驚いたものの、懐かしい匂いと思い出に包まれて、胸が温かくなる。
「……もう。リジェはいつまでも甘えん坊なんだから」
　ルフィアはそう言って笑うと、リジェを抱きしめ返した。
「本当に、探したよ。君が突然、何も言わずにいなくなるから……」
「ごめんなさい、リジェ。私だって、急にお父さんやお母さんが遠くに行っちゃうなんて思ってなかったから」
「そうだね」
　リジェは微笑んだ。
「でも、こうしてまた会えたんだから、もういいさ。君とゆっくり話したいから、家に入れてくれる？」
「ええ、もちろんよ」
　ルフィアの中に、彼の頼みを断るという選択は存在しない。
　どれだけ時間が経とうとも、それは変わらない。
　彼女は頷いて、リジェを招き入れた。
「昔、お別れする前に、君が永遠に僕に仕えるって約束したことを覚えているかい？」
「ええ、もちろんよ。忘れるわけがないでしょう？」
「そうか……」
　その言葉を聞いて、リジェはすっと目を細める。
「じゃあ、従者らしく、ここでは僕を主人として扱ってほしいな。喋り方とかは、そのままでいいよ」
「ええ、わかったわ」

　ルフィアはなんの躊躇もなく頷いた。
　大抵の者なら、幼い頃の口約束ごときで何を言うのかと一笑に付すか怒るかするだろうが、彼女はそうではない。
　リジェの頼みなのだから、何を置いても従うのが当たり前だった。
「まずは座り心地のいい椅子と、お茶が欲しいな。ここまで来るのに、ずいぶん疲れたから」
「すぐに用意するわね」
　ルフィアはにっこりと笑って頷くと、リジェに柔らかなソファを勧め、ぱたぱたと台所へと駆けていった。
　そしてすぐに、お茶を淹れて菓子と一緒に持って戻ってくる。
「はい、どうぞ」
「ありがとう」
　リジェはそれを受け取ると、カップに口をつける。
「美味しいよ」
「ふふ、良かったわ」
　リジェの言葉に、ルフィアが嬉しそうに微笑んだ。
「ここに頭を載せて、僕の抱き枕になって」
　そう言ってぽんぽんと膝を叩くと、ルフィアは素直にそこに頭を載せて、横になった。
「これでいい？」
「うん」
　膝枕の状態のまま、ルフィアは優しく髪を撫でられる。
「気持ちいい？」
「ええ……」
　うっとりした表情で頷く彼女に、リジェは満足そうに微笑んだ。
「僕も楽しいよ」
　そう言いながら、手を滑らせていく。
　頬を撫で、唇を指でなぞる。
「んっ……、もう。リジェったら、そんなにいたずらっ子だったかしら？」
　抵抗もせず、くすぐったそうに身をよじる彼女を見て、リジェはくすくすと笑った。

「君こそ、昔は元気いっぱいで、僕の手を引っ張って外に連れ出していくような子だったのに。女らしくなったね」
「私は私よ。そんなに簡単に変わったりしないわ」
　ルフィアは少し拗ねたように言うと、手を伸ばしてきてリジェの頭をそっと撫でた。
　その優しい手つきに、彼はくすくすと笑った。
「確かにね。きれいにはなったけど、君の本質は変わらないな」
　依然として、自分によって生き返らされた、この上なく従順な蘇生体のままだ。
　彼女自身も、他の誰も知らないことだけれど。
（僕だけが知っている秘密か）
　そんなことを考えるだけで、優越感にも似た感情が湧き上がってくる。
（やっと、僕の手に帰ってきた。ルフィアは、この子はもう一生、僕だけのものなんだ）
　そう思うと、たまらなく愛おしかった。
　同時に、少年の頃に抱いたそれよりもずっと熱っぽい欲望が、体の底から湧き上がってくる。
「ふふっ」
　リジェは彼女の首筋へ、肩へと手を滑らせていく。
　彼女は抵抗も抗議もせず、身を任せていた。
　けれど、その手が乳房の上に至ると、ルフィアは少し頬を赤らめて、それをそっと押さえた。
「それ以上はだめよ、リジェ」
「え……」
　思いがけない反応に、彼は困惑する。
「……どうして？」
「私は結婚しているから。夫以外の男性と、そういうことをするわけにはいかないのよ」
「っ！」
　リジェは一瞬、ショックを受けたように顔を強張らせた。
　だが、次の瞬間には元の笑顔に戻る。
　それは表向きだけで、胸中にはドロドロとしたドス黒い思いが渦巻いていたが。

「……へえ、そうか。君はもう、結婚してたんだね」
「ええ、そうよ」
「旦那さんはいい人かい？」
　ルフィアは嬉しそうに微笑んで答える。
「ラーフェンは、優しくて誠実で、素敵な人だわ」
「そうか、おめでとう」
　リジェはにこにこしながらそう言ったが。
「でも、関係ないなあ」
　そのまま表情を変えずに、言葉を続ける。
「君は彼に会うよりもずっと前から僕に仕えているんだから、僕に望まれたならどんなことであれ、してもさせても問題ない。そうだろう？」
　そう言われると、蘇生体であるルフィアはあっさりと受け入れた。
「ああ、そうね。その通りだわ」
　頷くと、リジェの手を押さえていた自分の手をそっと離した。
　その手がそのまま自分の乳房の上をなぞり始めても、それをきゅっと掴んでも、ルフィアはもう恥ずかしがりもせず、拒みもしなかった。
「すごく柔らかいよ。それに、あたたかい」
　リジェは感嘆の声を漏らして、その感触を楽しむようにゆっくりと揉む。
「あっ……、んん……っ」
　ルフィアは悩ましげに身を捩り、吐息を漏らしながらも、されるがままになっていた。
「僕が手を入れやすいように、胸元を開けて」
「こう、かしら？」
　言われるままに、彼女は服のボタンを一つ外す。
　すると、白い胸の谷間が露わになった。
　リジェはその深い谷底に、人差し指を差し込んだ。
「あんっ」
　指先が柔らかい膨らみに直接触れ、彼女がぴくんと体を震わせる。
　けれど、決して抵抗はしない。
　恥ずかしそうな様子さえも見せずに、当たり前のこととして受け入れている。